

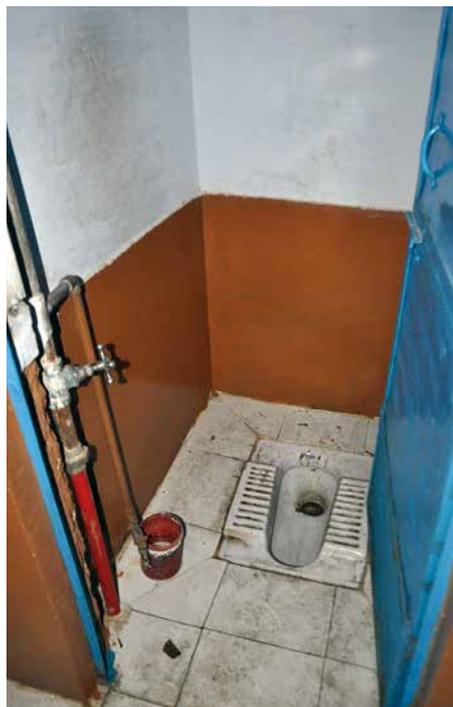
インドのトイレの話

汚い話で恐縮ですが、大でも小でも、排泄は私たち人類にとって欠かすことのできない行為であり、一生涯つきまとうものです。なぜトイレを話題にするかという、2014年5月に就任したナレンドラ・モディ新首相が公約の1つに掲げていたのが「トイレの普及」だからです。インドはトイレにアクセスできない人口は、全人口の64%と言われていて、実数にすれば約7億7千万人の人びとがトイレを使用していないことになります。現代日本人の常識からすれば、驚異的なことですが、私は学生時代以降かれこれ10数年インドをうろつきまわっていて、この数字は納得できます。数年前まではインド北西部の農村で考古学の発掘調査に従事していて、現在は同じ地域の農村の生業に関わる調査をしているため、よく事情がわかるのですが、インドの農村にトイレが存在しないというのは事実です。では、どうしているかという…男性であろうが女性であろうが、屋外の物陰で大も小もすませるのです。子どもにいたっては家の前や道路沿いで隠すことなくしています。成人男性も小の方であれば、都市部(首都郊外)でも道路沿いでしています。かくいう私もすっかりインドに染まり、同様にしています。もち

ろん、都市部の家庭や宿泊施設にはトイレはありますが、多くがインド式であり、紙は決して使わず水で処理するタイプのものです(写真①)。

インドにおけるトイレの普及

前置きが長くなりましたが、なぜインドの首相が「トイレの普及」を公約に掲げているかとい



写真①インド式トイレ



写真②村に新規設置されたトイレ(ラージャスターン州)

108



写真③街に新規設置されたトイレ(ラージャスターン州)

うと、第1に公衆衛生の問題でしょう。第2には、インド世界を知らないとは理解できないのですが、特定の人の救済のためです。インドの農村部の一部地域には、人の糞尿を処理するための専門集団がいて、彼らは不可触民として忌避されています。彼らのこの仕事からの解放も、「トイレの普及」には含まれているのです。インドにはカーストという身分制度があると知られていますが、カーストは外来語であり、正しくはヴァルナ（四姓（僧侶—戦士—平民—奴隷）による身分制度）とジャーティー（職能分類）が合わさった複雑な社会システムです。不可触民はヴァルナの埒外に置かれていますが、しっかり職能分類のジャーティーには組み込まれている存在です。不可触民やトライブと呼ばれる民族集団は、旧政権（インド国民会議派）でも新政権（インド人民党）においても庇護されていて、進学や就業において特定のポストが確保されています。しかし、それでも貧困や差別にあえぐ不可触民がまだ多くいるため、新首相の「トイレの普及」があるのです。一方、ハイ・カーストと呼ばれるヴァルナ上位者（僧侶—戦士）が、就業時に自らよりも能力的に劣る低カーストの人びとが優先的に採用されるため、職に就けないという逆差別も深刻な社会問題となり、この国に影を落としています。

トイレから考えるインドの将来

現在、新首相の「トイレの普及」の音頭取りにより、この国としては驚異的なスピードで地方都市や農村部に「唐突」に公衆トイレが設置されています。農村部では小学校の前に、教育目的（トイレの存在を知らない子どもをなくすためや使用方法を教えるため）のためにトイレが設置されるのですが、前政権時から進められていたこの政策は遅々としていました。しかし、新首相就任後の今回、農村部を回ったところ真新しいトイレがいくつもできていました（写真②）。また、調査の基地としている地方都市の街角にも公衆トイレが新たに設置されていて（写真③）、公約が実施されていることが確認できました。しかし、これらのトイレには致命的な欠陥がいくつもあります。まず農村部ですが、明らかに数が足りない上に扉さえついていません。また、排泄物はトイレの外に垂れ流しで、公衆衛生上の改善は皆無です。いくつかのトイレも観察しましたが、使用の形跡があるものもまた、皆無でした。次に都市部のトイレですが、大都市を除き女性用のトイレが少なく、もちろん数も足りていません。また、都市部でも排泄物はトイレの外に垂れ流しで、公衆衛生上の改善は十分ではありません。いずれも、言われたから作りましたという感じがぬぐえず、トイレの設置の

前に下水道などのインフラ整備が先であろうと、素人でも指摘できる状態なのです。地方都市では、下水どころか上水道すら整備されていないこともよくあります。

経済発展著しく、次世代の経済的リーダー BRICS の一角を担うインドですが、このように基礎的なインフラが整備されていないのが現状で、急速な発展にさまざまな社会システムが追いついていません。経済発展も大切ですが、常に自らの足元を見つめ、時には立ち止まることも社会にとって必要だろうと、トイレにこもって考えてみました。

が。友人に事情を尋ねると、汚水の排水設備まではきちんと施工されておらず、トイレを使うのにも慣れていないため、使用する人は限定的で、無償提供されたコンクリート造りの構造物は穀物庫として最適だと喜ばれているそうです。トイレの「数」は増えたようですが、「使用者」は増えてはいないようで、変わらぬインドがまだ続きそうです。

遠藤仁

その後のトイレの話

インドの新政権発足後、2年以上が経過し、トイレの普及はどうなっているのでしょうか。西ベンガル州を例に見てみます。

西ベンガル州の場合、村落部の裕福ではない不可触民やトライブの家庭1軒につき、1つのトイレを無償で設置するという政策がとられ、すでに多くの場所で真新しいトイレが造られていました(写真④)。私は村に隣接する友人宅に滞在していたのですが、朝のトイレ時間、多くの村人が、木陰に用を足しに行くのが目につきます。トイレがあるのになぜ、と村人に尋ねると、トイレは穀物庫として重宝していますとの答え



写真④無償で設置されたトイレ